

長尾雨山が上海で参加した詩會について

松村茂樹

はじめに

大正三年（一九一四）十二月、漢學者・長尾雨山（一八六四—一九四二）は、足かけ十二年にわたる上海滞在を終えて歸國し、京都に卜居して、關西文墨界の指導者的存在となる。そのきっかけとなったのが、雨山の主宰になる壽蘇會、赤壁會という宋の蘇東坡をしのぶ詩會の開催であった。

壽蘇會、赤壁會には、學界、書畫文墨界のみならず、政財界、新聞出版界などから漢學の素養を有する人士が集い、内藤湖南（二八六六—一九三四）や犬養木堂（一八五五—一九三二）の人脈とも重なって、一大ネットワークを形成し、大きな影響力を有することになる。

雨山は、これらの會について、中國で参加した詩會を日本でも行おうとしたものであるとし、しかも、上海の詩會は、自らの創始になるという。

本稿では、この雨山が中國で参加し、しかも創始したという詩會について考察し、それらの詩集に收められている詩を紹介したい。このことにより、長尾雨山という當時最先端の中國文墨趣味に通じた漢學

者の果たした貢獻に、照明をあてることができよう。

なお、長尾雨山については、雨山の五男・長尾正和の「長尾雨山」（禮之の筆名を用いている）（一）〜（十二）『冊府』第十〜二十一號・一九五九〜一九六五・彙文堂書莊所收、杉村邦彦「長尾雨山とその交友」（一）〜（十五）『墨』一一六號〜一三〇號・一九九五〜一九九八・藝術新聞社所收）、杉村邦彦「有關長尾雨山の研究資料及其韻事若干」（中文）（『印學論談』一九九三・西泠印社出版社所收）などの研究がある。

また、上海時代の雨山と勤務した商務印書館の關係については、樽本照雄『清末小説閑談』（一九八三・法律文化社）、同『初期商務印書館研究増補版』（二〇〇四・清末小説研究会）などの研究が、詩友として交わった吳昌碩（一八四四—一九二七）との關係については、拙著『吳昌碩研究』（二〇〇九・研文出版）所收論文および拙稿「長尾雨山と吳昌碩」（『中國文化』第七十二號・二〇一四・中國文化學會）などの研究があり、雨山が壽蘇會で詠じた宋の蘇東坡にまつわる詩については、池澤滋子「長尾雨山と蘇軾」（『現代中國文化の軌跡』二〇〇五・中央大學出版部所收）がある。ただ、これらの研究には、雨山が上海で参加した詩會についてはほとんど觸れられていない。雨山の上海時代の詩である

「五十自嘲詩」を紹介した杉村邦彦「上海時代の長尾雨山の翰墨生活一斑―五十自嘲詩と潘存臨鄭文公下碑跋―」（『書學書道史論叢』2011・2011・萱原書房所収）にも、論及はないが、「私がこれまで蒐集してきた雨山の遺稿の中から、上海滞在中の年月を明記した遺詩・遺文で、本稿に取り上げた以外のものを、後日の参考のため年月順に列挙しておく」として、計十六篇の詩文を挙げており、この中に見える「劉炳照著復丁老人詩記跋明治四十一年戊申（一九〇八）五月」と「語石先生（劉炳照）以百老吟見示、步原韻二首 錢湖者輯百老吟所收、庚戌（宣統二年、一九一〇）太倉錢氏聽邠館刊本」の二篇は、雨山が上海で参加した詩會に關する詩文であり、詩文名と所收刊本名のみとはいえ、これを紹介した意義は大きい。本稿執筆においては、この二篇の詩文にあたることから資料調査を開始した。このことを記し、先學に感謝したい。

一、長尾雨山と壽蘇會、赤壁會

長尾雨山は、通稱を楨太郎、名を甲、字を子生といい、雨山、石隱、无悶と號した。その居を何遠樓、岫聖堂、漢博齋という。讚岐高松の人。東京大學古典講習科を卒業後、學習院教師、東京美術學校講師、第五高等學校教授、東京高等師範學校教授などを歴任、いわゆる教科書疑獄事件にまきこまれ、無實の罪で東京高師を辭職、明治三十六年（一九〇三）十二月、上海に渡り、商務印書館に勤務した。商務印書館では、主に教科書編纂にあたり、日本のノウハウを中國に傳え、『最新國文教科書』（一九〇四・商務印書館）などを校訂した。また、劉炳照（一八四七―一九一七）と共に上海で詩會を興し、後、隣人となつた吳昌碩の紹介で、西泠印社同人にもなつた。大正三年（一九

一四）十二月、上海在住尼かけ十二年、實質十一年で歸國し、京都に寄寓、平安書道會副會長などをつとめ、在野の學究として尊敬を集めた。

雨山は歸國後、敬慕する宋の蘇東坡を記念する壽蘇會、赤壁會を開催している。これらについては、前出の長尾正和「長尾雨山」（八）（十）（『冊府』第十七〜十九號・一九六二）一九六四・彙文堂書莊所收、同「京都の壽蘇會」（『書論』第五號・一九七四・書論編集室所收）、同「壽蘇會と赤壁會」（上）（下）（『墨美』第二五二、二五三號・一九七五・墨美社所收）、および柏木知子「富岡鐵齋の見た壽蘇會」（『鐵齋研究』第七二號・二〇〇九・鐵齋美術館所收）^③に詳しい。これらの資料をもとに、各會の日時、場所、關係者を抜粹する。

① 乙卯壽蘇會・大正五年（一九一六）一月十二日（陰曆乙卯十二月十九日）於圓山春雲樓（左阿彌）

主催者…富岡桃華、長尾雨山 參加者…富岡鐵齋、山本竟山、羅振玉、羅福長、王國維、内藤湖南、狩野君山、上村閑堂、磯野秋渚、西村天囚 周旋者…原田大觀

② 丙辰壽蘇會・大正六年（一九一七）一月十二日（陰曆丙辰十二月十九日）於圓山春雲樓（左阿彌）

主催者…富岡桃華、長尾雨山 參加者…富岡鐵齋、山本竟山、榊原鐵硯、江上瓊山、高野竹隱、桑名鐵城、羅振玉、羅福長、上野有竹、本山松陰、靱山衣洲、磯野秋渚、西村天囚、小川簡齋 協贊者…白石鹿叟、友永霞峰 周旋者…原田大觀

③ 丁巳壽蘇會・大正七年（一九一八）一月三十一日（陰曆丁巳十二月十九日）於圓山春雲樓（左阿彌）

主催者…長尾雨山 參加者…靱山衣洲、磯野秋渚、江上瓊山、山

本竟山、高野竹隱、柚木玉邨、内藤湖南、木内東洋、狩野君山、羅振玉、羅福長 周旋者・原田大觀

④己未壽蘇會・大正九年(一九二〇)二月八日(陰曆己未十二月十九日)於圓山春雲樓(左阿彌)

主催者・長尾雨山 參加者・柴田節堂、江上瓊山、山本竟山、高野竹隱、上田丹厓、朽木研堂、内藤湖南、鈴木豹軒、奥村竹亭、磯野秋渚、松本香洲、永田聽泉 協賛者・吳昌碩、吳臧龕、王一亭、丁輔之、白石鹿叟、友永霞峰

⑤庚申壽蘇會・大正十年(一九二一)一月二十七日(陰曆庚申十二月十九日)於圓山清風閣(左阿彌)

主催者・長尾雨山 參加者・富岡鐵齋、鈴木豹軒、松本香洲ほか 不明

⑥壬戌赤壁會・大正十一年(一九二二)九月七日(陰曆壬戌七月十六日)於洛南宇治橋西萬碧樓(菊屋)

發起人・犬養木堂、國分青厓、西村天囚、牧野靜齋、菊地惺堂、山本二峰、黒木欽堂、榊原鐵硯、田邊碧堂、磯野秋渚、本山松陰、小川簡齋、林蔚堂、阪田九峰、荒木看雲、柚木玉邨、橋本海鶴、大西見山、富岡鐵齋、狩野君山、内藤湖南、鈴木豹軒、山本竟山、大谷禿庵、三浦梅癡、奥村竹亭、長尾雨山(實質的主催者)

⑦丙子壽蘇會・昭和十二年(一九三七)一月三十一日(陰曆丙子十二月十九日)於岡崎つる家

發起人・伊藤壽一、入澤昕江、出雲路春鳩、稻垣龍峰、石田凌風、小川陸之助、大谷瑩誠、大塚雨峰、高瀬惺軒、園田湖城、中井焦陰、長尾雨山(實質的主催者)、中川白雲、中村準策、中村石嶺、中野越南、樂雙橋、野村得庵、能勢照郷、熊谷直之、山本紫竹、

長尾雨山が上海で参加した詩會について

八木清八、松井貞太郎、松永非石、牧野梅窓、藤井靜堂、小村大雲、阿部筌洲、柚木玉邨、水田竹圃、三浦梅癡、三野二山、箕浦蓼江、庄司杜峰、柴田瞻山、守屋孝藏、瀬川犇山、杉野儼山

ここに見える關係者は、内藤湖南・狩野君山(二八六八―一九四七)等の學界、富岡鐵齋(一八三七―一九二四)・山本竟山(二八六三―一九三四)等の書畫文墨界のみならず、犬養木堂・小川簡齋(二八七〇―一九二六)等の政財界、上野有竹(一八四八―一九一九)・本山松陰(一八五三―一九三三)等の新聞出版界、さらには、吳昌碩・羅振玉(一八六六―一九四〇)等の中國人士に及んでおり、これらをネットワークでつないだ雨山の功績は極めて大きいと言わねばならない。

なお、白石鹿叟(一八六八―一九三四)と友永霞峰(生卒年未詳)は、上海で日本料亭および古玩書畫店を営む實業家で、丙辰壽蘇會には松江の鱸魚を、己未壽蘇會には鰻魚を送ってきた。また、己未壽蘇會の際、吳昌碩と次男の吳臧龕(一八七六―一九二七)は詩を、吳昌碩の弟子でパトロンの王一亭(一八六七―一九三八)は畫を、吳昌碩が社長をつとめる西冷印社の發起人の一人である丁輔之(一八七九―一九四九)は「蘇文忠公笠屐象硯拓本」を寄せてきた。これらの協賛者はすべて雨山上海時代の知友である。

二、雨山創始になる上海の詩會

雨山は、講演録「支那南畫について」(長尾雨山『中國書畫話』・一九六五・筑摩書房所収)の中で、

私が支那におりました時分に文學やその他の學問の上につきまして、多くの先輩諸大家の人と親しくしておりました。毎月集まって詩を作ったりすることもやっておりました。一日詩會があり

まして、そのとき偶然蘇東坡の誕生日にあたつておりました（後略）と述べ、上海で詩會に参加していたこと、そして、ここでは偶然と言つてゐるが、それが蘇東坡にまつわるものであつたことを明かしている。

また、「丁巳壽蘇錄序」（長尾雨山『丁巳壽蘇錄』・一九二〇・私刊本所收）の中で、

向者、甲客遊禹邦、屢與彼土名流、同爲蘇公生日燕集。既歸禹西京、仍欲繼修故事、乙卯歲、與富岡君搗、開壽蘇筵、年以爲例。〔以前、私は中國に客遊し、たびたび彼の地の名流と共に、蘇公生日の宴會をした。歸國後京都に寓居し、なお舊事を繼續しようとして、乙卯の年、富岡君搗（富岡鐵齋の長男・富岡桃華）と謀つて壽蘇會を開き、年會を例とした。〕

と述べ、壽蘇會は、中國で参加した詩會を日本でも行おうとしたものとしてゐる。

さらに、晩年の雨山と交わつた古川幸次郎（一九〇四—一九八〇）は、「解説」（前出長尾雨山『中國書畫話』所收）の中で、以下のような證言をしている。

また詩社を作つて、人人と唱和したのが、上海の詩社のはじまりであると、いずれもあとでのべるように、京都東山の酒樓で私が奉手した際の、談資である。

つまり、雨山自身が、上海の詩會を創始したと述べていたというのである。

雨山がこれについて言及した資料がある。長尾雨山「復丁老人詩記敘」（劉炳照『復丁老人詩記』・一九〇八・私刊本・關西大學圖書館内藤文庫

藏所收）の冒頭に、

甲巖解文字、游莒中原、與海上寓公、聯吟結社。迭爲賓主、所拳拳服膺者、有友五人焉。

〔私はあらゆる文字を解し、中國に遊藝し、上海に寓居する人々と、共に詩を作るべく社を結んだ。互いに賓主となり、胸に銘じて忘れないのは、五人の友である。〕

とあり、鄭蘇龕、金夔伯、汪淵若、孟庸生、劉語石の五人があげられている。

鄭蘇龕（一八六〇—一九三八）は、名を孝胥といい、福建閩縣の人、後に滿州國總理になる人物で、東京で副領事をしていた一八九一年、雨山と知り合つてゐる。金夔伯（生卒年未詳）は、名を石といい、浙江會稽の人、雨山の上海における早期の詩友で、詩古文詞を工みにし、併せて書法をよくした。汪淵若（一八四六—一九一五）は、名を洵といい、江蘇陽湖（武進）の人、詩文書畫にすぐれ、海上題襟館金石書畫會の初代會長をつとめた。孟庸生（一八七一—一九一八）は、名を昭常といい、江蘇武進の人、日本の法政大學に官費留學し、一九〇五年に歸國、翌年、鄭孝胥と共に上海で預備立憲公會を組織した。劉語石は、名を炳照といい、江蘇陽湖（武進）の人、武進の名門である西營劉氏の第十五世（同じ名輩に公羊學者の劉逢祿がいる）で、詩詞を工みにした。

この「復丁老人詩記敘」は、最後にあげられている劉炳照が自らの人生を詠じた詩をまとめた『復丁老人詩記』に寄せた序文で、雨山は、この劉炳照と共に、上海で詩會を創始したのである。

では、雨山は劉炳照とどのように出會ひ、この詩會はどのように行われたのであろうか。劉炳照は、「日本長尾雨山博士甲」詩（劉炳

照『感知集』下・一九〇五・私刊本・關西大學圖書館內藤文庫藏 所收)の
で、以下のように述べている(〽)は割注、以下同)。

吾聞長尾君、石翁文字友。神交遞詩筒、夜遊共樽酒(是歲中秋、
君招飲徐園、即席賦五古一首。予及石翁依韻和之、復成聯句一章。
餘不一格、作者七人)。詩記續東瀛、我愧曲園叟(陰甫先生與日
本詩人唱和、成集手輯東瀛詩記、敘述甚詳)。

(私は長尾君が、石翁(金石)の詩文の友であると聞いた。意氣
投合して詩のやりとりをし、夜には遊んで樽酒を共にした(この
年(乙巳(一九〇五))の中秋、長尾君は徐園(雙清別墅)に招飲し、
即席で五古一首を賦した。私および石翁はその韻に和し、また聯
句一章を作った。その他一格にとられず作り、作者は七人であ
る)。この詩會の詩は愈曲園『東瀛詩選』に續くものとなるが、
私は曲園叟(愈樾)に愧じるばかりである(陰甫先生(愈樾)は
日本の詩人と唱和し、手ずから『東瀛詩選』を編纂したが、その
敘述は甚だ詳しい)。

つまり、雨山は、まず金石と詩文の交誼を結び、次に劉炳照と出會
い、乙巳中秋の夜、徐園つまり雙清別墅に金石および劉炳照を招いて
宴會を開き、即席で五古一首を賦したところ、劉炳照と金石がその韻
に和し、また聯句一章を作り、この三人を含めて計七人で詩のやりと
りを行ったのである。

また、劉炳照『復丁老人詩記』に見えるこの年の詩に、以下のよう
にある。

東海詩人接席初、雙清別墅集簪裾。聯吟三過聽芝館、讀畫重尋
亦愛廬。(日本詩人長尾語(雨の誤り―松村注)山、首創詩社于徐
氏雙清別墅。繼之者聽芝館主人汪淵若、亦愛廬主人朱念陶、敲詩

長尾雨山が上海で參加した詩會について

讀畫、爲海上別開生面)。

(日本の詩人と席を接するのは初めてで、雙清別墅には貴人が集
う。聯句すること三たびの聽芝館(汪淵若)、畫を鑑賞し重ねて考
究している亦愛廬(朱念陶)。(日本詩人の長尾雨山は、はじめて
詩社を徐氏雙清別墅に創設した。これを繼いだのが聽芝館主人汪
淵若、亦愛廬主人朱念陶で、詩を作り畫を鑑賞して、上海に新生
面を開いた。)

朱念陶(一八六八?)は、名を錕といい、安徽安吳の人、劉炳照
に師事し、詩文書畫および篆刻をよくした。ここで、劉炳照も、雨山
が詩會の創設者であると述べている。そして、その詩會は、汪淵若、
朱念陶によって受け繼がれたという。劉炳照の詩集である『無長物齋
詩存』(一九〇八・私刊本・關西大學圖書館內藤文庫藏)所收の詩によつ
て、それらの詩會を窺うことができる。順を追って見て行こう。

まず、卷一に「雨山招飲徐園、即席賦詩、依韻奉酬」詩が見える
が、これは乙巳中秋の夜、雨山が徐園つまり雙清別墅に招いた時の
詩である。次に、「九月既望、予與長尾雨山、金夔伯、丁仲鴻、談小
蓮、劉鶴儔、褚紹欽、曹恂卿、王菽田、李藻丞夜飲寶樹胡同洪錄事
家、偶述舊遊、即席感賦」詩が見え、その直後の九月既望(舊曆、以
下同)、劉炳照が、上海六馬路寶樹胡同の妓館・洪錄事家に雨山等を
招いている。そして、次に「聽芝詩社第一集、分韻得人字」詩が見え
る。

知己天涯若比鄰、德星此聚亦前因。他鄉待續西園集(與會者十
有三人、王君又點、鄭君稚辛皆係閩人、不期而至)、豪士來從東
海濱(謂雨山)。偶作清遊才絕俗、喜拈險韻語驚人(夔伯分得凡
字、作柏梁體詩一首、精悍逼人)。坐中不少龍眠畫(石香、夔伯、

小蓮三君工畫、主客圖成爲寫眞。

〔知己は遠くにいても近くに思うように思うものだが、立派な徳のある人がここに集まるのも前世の因縁であろう。他郷で宋の西園雅集に續くような詩會を催せば（参加者は十三人、王又點君、鄭稚辛君は共に閩（福建）の人で、期せずして参加した）、才力他に勝る士が日本から来た（雨山をいう）。たまたま風雅な遊びをしたら絶俗の才を發揮し、好んであまり使われない韻をひねつて人を驚かせる語を使う（金夔伯は凡字の韻が與えられたが、句ごとに韻をふむ柏梁體の詩を一首作り、精悍さに壓倒された）。

参加者には少なからず宋の李龍眠（公麟）のような人がおり（劉石香、金夔伯、談小蓮の三君は畫を工みにする）、主人である汪淵若も客も繪を畫けば眞を寫すかのようだ。〕

王又點（一八六七—一九二九）は、名を允哲といい、福建長樂の人、光緒の舉人で、詩詞にすぐれた。鄭稚辛（一八六三—一九四六）は、名を孝稷といい、鄭孝胥の實弟、兄が領事をしていた神戸で留學生を管理する事務に携わった後、上海に來ていた。劉石香（一八四三—一九〇五）は、名を繼増といい、無錫の人、楊峴（一八一九—一八九六）門下で、書畫にすぐれた。談小蓮（？—一九二二）は、名を理といい、傳奇詞曲を工みにし、篆刻をよくした。これが汪淵若主宰になる聽芝詩社の第一集（第一回目の參集）で、宋の西園雅集を志向していたことがわかる。西園雅集は、宋の王詵が蘇軾、蘇轍、黃庭堅、米芾、李公麟等十六名を招いて催した雅集で、この中には日本の圓通大師（大江定基）も含まれていた。唯一の日本人参加者である雨山はこれに擬せられてゐるはずである。また、畫にすぐれた李公麟が、この圖を畫いており、劉石香、金夔伯、談小蓮がこれに擬せられてゐる。

次いで、「聽芝詩社第二集、爲念陶補題王漁洋先生抱琴洗桐圖遺象卷子」詩、「聽芝詩社第三集、敬和明蔡忠烈公漁家詠墨蹟原韻」詩が見えるが、詩題からこれらの會にはメンバー所藏の書畫が披露されていたことがわかる。そして、次に「仲冬既望、亦愛廬讀畫雅集、卽席賦贈念陶、竝索同坐雨山、淵若、石香、夔伯、小蓮、恂卿諸子和」詩（四首）が見える。その第一首を引いておく。

讀畫招新侶、驅車向澗阿。七賢良宴會、二客病頭陀（吳倉碩、陸廉夫因病未與斯會、兩君年踰六十均未留鬢故云）。邱壑胸中具、煙雲眼底過。憐予衰更甚、對酒不成歌。

〔畫を鑑賞すべく新しい仲間を招いており、車を驅つて高士の集まるところに向かう。七賢は宴會を楽しみ、二客は托鉢に病む（吳倉碩、陸廉夫は病のためこの會に参加しておらず、兩君は六十歳を越えているのに均しく鬚を蓄えていないのでこのようにいう）。邱壑は胸中に具わり、雲煙は眼底を過る。憐れ私は衰えること更に甚だしく、酒を前にしても歌を成さない。〕

吳倉碩は吳昌碩の別字。陸廉夫（一八五一—一九二〇）は、名を恢といい、吳大澂（一八三五—一九〇二）幕下、晩年は繪畫に潛心した。劉炳照は、畫にすぐれたこの二人に會うのが楽しみであったようだが、缺席と知り、大いに落膽している。これが、朱念陶主宰の亦愛廬讀畫雅集の始まりで、乙巳（一九〇五）仲冬（十一月）既望に開かれてゐることがわかる。

これらの雅集について、朱念陶は、「復丁老人詩記跋」（前出『復丁老人詩記』所收）の中で、以下のように述べてゐる。

疇昔又與汪淵若、呂蟄齋、鄭蘇堪、稚辛、王又點暨日本長尾雨山相酬倡。時夔伯亦客滬、月必二三集于汪氏聽芝館、觴詠爲樂。

鏡所居有舞紅小榭、疊石通池、襍樹卉木、先生愛其清幽、嘯侶相過、敲詩讀畫、夜以繼日。此亦愛廬雅集所由昉也。

〔劉炳照先生は、先頃また汪淵若、呂蟄盒、鄭蘇堪・稚辛兄弟、王又點および日本の長尾雨山と相い酬唱した。時に金夔伯も上海におり、月に必ず二三回は汪氏聽芝館に集まって、杯を傾け詩を詠じるのを樂しみとした。私の居所には庶が紅い小亭、池に通じる石疊、雜樹草木があり、先生（劉炳照）はその清幽を愛し、同伴を呼びかけて立ち寄り、詩を作り畫を鑑賞して、夜を日に繼いだ。これが亦愛廬雅集の始まりである。〕

呂蟄盒（一八五九—一九三〇）は、名を景端といい、江蘇陽湖の人、在京の官を辭し、上海に客寓していた。鄭蘇堪は鄭孝胥の別字。このように、雨山が創始した詩會は、劉炳照が中心となり、汪淵若、朱念陶が主宰する形で、文墨の會として開催された。これは、雨山の壽蘇會・赤壁會にも引き繼がれている要素である。

さらに、『無長物齋詩存』所收の詩を追うと、卷二に「四月二十七日長尾雨山招汪淵若、金夔伯、鄭蘇堪、沈越若、錢禮南、丁仲鴻、曹恂卿與予共九人徐園續集、即席口占」詩が見える。これは丙午（一九〇六）四月二十七日に開かれた雨山主宰の徐園續集での作で、次に「閏夏五日、亦愛廬讀畫續集、即席口占、仍用徐園紀事詩韻」詩が見え、その七日後の閏四月初五日、また朱念陶主宰の亦愛廬讀畫續集が開かれており、劉炳照は雨山の徐園續集で用いた韻で詩を作っている。これより、雨山も含め、持ち回りで詩會が主宰されていたことがわかり、その主要な一角を占めていた雨山の充實は想像に難くない。

三、劉炳照との親交

さて、徐氏雙清別墅での詩會を機に、雨山と劉炳照はかけがえのない詩友となった。劉炳照は、雨山と知り合って間もない一九〇五年、知人を詠じた詩を集めた前出『感知集』を刊行しているが、これに雨山は題簽を書き、題詞を寄せている。この題詞の韻に和して作られた、劉炳照「日本長尾雨山辱題感知集次韻奉酬」詩（一九〇五作）（前出『無長物齋詩存』所收）に、以下のようにある。

知己半爲鬼、懷人楊柳臺。我方天際想、君自日邊來。歷史錄金鑑（雨山博通史學）、奇書折玉杯（日本藏書最富、海禁既開古本日出）。新詩枉投贈、讀罷頓忘哀。

〔知己は半ば鬼籍に入り、楊柳臺に登って追憶していた。私がまさに天の果てを想っていると、君が日の昇るあたりからやって來た。歴史を録すること張九齡『金鑑』のようで（雨山は史學に博く通じている）、奇書を捜すこと董仲舒『玉杯』のようである（日本は藏書に最も富み、鎖國令が解かれてからは古本が日々流出している）。新詩をわざわざ贈ってくれ、讀み終わるとにわかに哀しみを忘れた。〕

待約東瀛客、同登振武臺。狂瀾斯世倒、舊雨幾人來。君尙留詩卷、誰堪共酒杯。奇才終磊落、拔劍有餘哀。

〔日本の客と待ち合わせ、ともに振武臺に登った。動亂がこの世を覆っており、古い友人でも何人來ることか。君は詩で世に名を留めようとしているが、酒杯を共にできる知音がない。この奇才はついにこたわりを棄て、劍を抜いて悲しみをぶちまけたいかのようだ。〕

第一首では、雨山との出會いを述べ、その博學を稱え、交誼に對する感謝が添えられている。そして、第二首では、不穩な政情を述べた後、雨山の胸中を思いやり、尾聯で杜甫「短歌行贈王郎司直」詩を踏まえ、雨山を不遇の王郎に擬えている。もしかしたら雨山は、家族にも多くを語らなかつたという教科書疑獄事件による自らの不遇を、劉炳照には語っていたのかもしれない。もしそうなら、雨山にとつて劉炳照は肝膽相照らす無二の親友となつていたことになる。

そんな雨山の劉炳照への思いを、長尾雨山「語石先生以百老吟見示步原韻二首」詩（錢溯者『百老吟』・一九二〇・太倉錢氏聽邨館・京都大學人文科學研究所所收）によつて窺うことができる。

自我來淞濱、先交蔗畦老（謂金君夔伯）。別墅署雙清、良夜金尊倒。卓爾復丁翁、盛名夙知曉。陳詩當執雉、介壽爭獻棗。昔聞書庫焚、塵存劫餘藥。擊鉢鬪新詩、揮豪競速藻。周旋繁敦問、結想雲霞表。神契在文章、遠游奚足惱。齊晉狎主盟、邾莒附庸保。

〔私は上海に来て、先ず蔗畦老（金夔伯）をいう〕と交わつた。別墅は雙清といい、月夜に酒樽を倒したものだ。卓越した復丁翁（劉炳照）は、盛名が夙に知られていた。皆が詩を献上することやうやくしく、長壽をことほぎ争つて盃が獻じられる。昔聞くことには書庫が火災に遭い、僅かに劫餘の稿を残すのみと。瞬く間に新詩を作つて詩合をし、筆を揮つて速筆を競う。盟友の間を周旋し、俗塵の外を思念する。私と詩文の交わりを持つてくださり、遠くこの地に來たこともどうして惱むに足ろうか。齊や晉の大國は主盟を交替でつとめ、邾や莒の小國は雇人として付き従うものだ。〕

下士隸東瀛、幸識中原老。高軒過衡門、迎賓屣屢倒。少小喜讀

書、歴史略通曉。嗜古獲奇珍、有逾兒嗜棗。文成遺名印、文正留手藁（近得王文成公名印、倪文正公手書叢藁四冊）。得寶勝鼎彝、開卷想容藻。徧乞時賢題、萬世人倫表。恐汚寒具油、不設客母惱。大名垂宇宙、文房子孫保。

〔下士である私は日本人であるが、幸い中國の老兄と知り合えた。立派な車が粗末な門につけられ、賓客をあたふたと歓迎する。年少の頃には讀書を好み、歴史にはほぼ通曉した。古を嗜んで珍奇なものを藏すること、子供が棗の實を好むのにも勝る。王文成は名印を遺し、倪文正は手稿を留めている（近ごろ王文成公（守仁）名印、倪文正公（元璐）手書叢稿四冊を得た）。このような寶を得たこと鼎彝に勝り、巻を開いてその容貌文藻に思いをめぐらす。あまねく當代の名士に題を乞い、とこしえに人倫の手本としよう。米芾のように菓子油で汚れるのを恐れ、客を設けないので惱むこともない。立派な名聲は宇宙に垂れ、書齋で子孫が受け継いでいる。〕

第一首では、劉炳照と知り合つた経緯を述べ、劉炳照の盛名と詩才を稱える。書庫が火災に遭つたとあるが、前出『復丁老人詩記』によると、劉炳照は一九〇四年、浙江吳興南潯の電報局を主管するため南潯に移家したが、翌年三月二十日（舊曆、以下同）、隣家の失火で藏書數千巻が灰燼に歸したという。劉炳照は、九月に失職し、十月に上海に客寓、十二月に同郷の汪淵若が住む上海葛盤路福海里に移居した。

よつて、雨山と知り合つた一九〇五年の中秋の頃は、失意の底にあつた時期ということになる。そんな劉炳照を雨山は温かく迎え、詩會の主宰を劉炳照や汪淵若に委ねたのである。末尾で、劉炳照等中國の詩人を大國に、自らを小國に喩えているのは、そのことを言っているの

であろう。そして第二首では、自らを下士として卑下し、中國の名士に教えを請いつつ、中國の學問に精勤し、中國の書畫を尊重する姿勢を示している。ただ、これも劉炳照等が雨山を尊重していたがゆえの謙遜なのであろう。

四、周夢坡主宰の詩會

その後、雨山と劉炳照の關係に變化が生じる。實業家の周夢坡（一八六四—一九三三）が、辛亥革命の後、上海に移居し、消寒雅集（略稱消寒集、季節會）、淞濱吟社（略稱淞社、月例會）といった詩會を主宰し、劉炳照を主要メンバーとして引き入れたのである。周夢坡は、名を慶雲といい、浙江吳興南潯の人、實業家として活躍し、金石書畫の收藏に富み、上記詩會を主宰した。吳昌碩等のパトロンとしても知られる。

周夢坡「壬癸消寒集序」（周夢坡『壬癸消寒集』・二九一四・私刊本所收）に、

余於辛亥歲避地淞濱一塵、風雪意境索寞。爰與劉子語石倡消寒雅集、始於壬子立冬至春而畢、明年癸丑亦如其例。

〔私は辛亥の年（一九一三）に淞濱（上海）の一角に亂を避けて隱棲し、苦難に心境はわびしかった。そこで劉語石（炳照）先生と

消寒雅集を提唱し、壬子（一九一三）の立冬に始め、春になって終え、明年の癸丑（一九一四）も同様に行った。〕

とあり、消寒雅集は、劉炳照と二人で主宰したと述べている。

この消寒雅集の初回、つまり消寒第一集で作られた詩は、前出周夢坡『壬癸消寒集』によって見る事ができ、劉炳照「壬子仲冬十有二日、消寒第一集飲於雙清別墅、觀周夢坡所藏趙松雪遺琴」詩、周夢坡

「長至前二日、與劉復丁（炳照）同宴海上新舊雨於雙清別墅爲消寒第一集、詩以紀之」詩などが收められている。これらの詩題から、消寒第一集は、壬子（一九一三）十一月十二日、雙清別墅で開かれ、周夢坡が自慢の藏品である元の趙松雪（孟頫）遺琴を披露していたことがわかる。

この消寒第一集に雨山は来ていたのだろうか。『壬癸消寒集』には、消寒第一集の際の雨山の詩は見えない。ところが、上記周夢坡詩は、周夢坡『夢坡詩存』（一九三三・私刊本）巻五に再録され、割注が增補されており、「高蹈談瀛海客逢」の句に、「謂雨山」と割注が付され、さらには、末尾に参加者十八名の名前が記されており、雨山の名も見える。⁸⁾つまり、雨山は消寒第一集に来ていたのである。

『壬癸消寒集』は、壬子（一九一三）、癸丑（一九一四）の二年にわたって開かれた消寒第九集までの詩を収めているが、雨山の詩として見えるのは、次に引く、消寒第二集の際の「消寒第二集、雪後集堅匏龕、次東坡聚星堂詩韻」詩（繆荃孫、劉炳照、汪洵（淵若）、潘飛聲、長尾甲（雨山）、朱鋌（念陶）、施賢唐、諸以仁、沈焜、楊晉、陸樹藩、周慶雲（夢坡）、劉承幹が唱和）のみである（續編の『甲乙消寒集』にも雨山の詩は見えない）。

朝來同雲飛葉葉、掩天覆地忽爲雪。鳥雀始疑爭下啄、漸積盈尺隻影絕。水泉凍堅草木摧、惟有庭前竹不折。風吹歷亂益得勢、高下巖壑一時滅。誰歟乘風馳獵騎、白額猛虎亦手掣。回首一箭落雙雕、血汗淋漓點成纈。垂老多病獨閉門、賈人餘勇意不屑。掬來煮茶手先龜、一啜放眼正飄瞥。聚星故事今雨續、袁安僵臥休嘲說。白戰已敗氣先餒、縮首擁被被如鐵。

〔早朝雪雲がゆらゆらと飛び、天を掩い地を覆ってたちまち雪に

なる。鳥や雀は始め疑い争つて啄み、漸く積つて一尺にもなればその影は絶える。水泉は凍結し草木は摧けるが、ただ庭先にある竹だけは折れない。風は吹き亂れますます勢いを得て、巖と谷を上下して急に消える。誰であろうか風に乗じて獵の馬を馳せ、白額の猛虎も手で撃つるのは。振り返つて一つの矢で二羽の鷺を落とし、血と汗が點々としたる。年を取り病も多く獨り門を閉ざすが、商人にも有り餘る勇氣があり細かいことにこだわらない。水を掬い茶を淹れる手先はひびわれ、一たび啜つて目を見開けばまさに雪せわしく舞い落ちている。歐陽脩そして蘇東坡が聚星堂に催した詩會は新たな友が續けているが、大雪の日に戸を閉ざした袁安は横臥し嘲りを言うのをやめよう。白戦にすでに敗れて氣勢はそがれており、首をすくめ歐陽脩は寝衣を鐵のごとく着込んで太白集を讀むことにする。」

なんとも意味深長な詩である。「誰であろうか風に乗じて獵の馬を馳せ、白額の猛虎も手で撃つるのは」とあるが、強大な新勢力の出現を言うかのようだ。そしてその新勢力は、「振り返つて一つの矢で二羽の鷺を落とし、血と汗が點々としたる」事態を引き起こしたという。この「二羽の鷺」は雨山と劉炳照なのであろうか。雨山は自らを歐陽脩に、劉炳照を蘇東坡に喩え、一人で創始した詩會を「新たな友」が引き継いでも、袁安のように横臥して嘲りを言わないとするのである。

實は、この詩は、消寒第二集に参加することなく、雨山が劉炳照に投じた詩であった。この経緯が、劉炳照の同詩に見える。

庭樹饑鳥蔽無葉、天公又復降大雪。孫康映讀夜不休、袁安僵臥糧已絕。送詩人來戶限穿（夢坡、琴南、雨山諸子侵晨叩門投詩）、

速客僕至屐齒折（雨山辭以疾、醉愚馳書敦促未至）。安車累因風尙侵、溫室圍爐火不滅。敝裘耐冷肩獨聳、凍腕欲書肘疑掣。撚髭衰態感鬢華、呵手寒氣皺面縷。好句偶得天落唾、清言相對坐霏屑。萍水乍鄉結心知、滄桑奇變驚眼瞥。堅匏盒中初筵開、小蓮莊裏舊事說（翰怡溥谿別業名小蓮莊、中有堅匏盒、滬寓亦懸是額）。老夫酒後發狂歌、起舞擊碎如意鐵。

〔庭の樹は飢えた鳥が蔽つて葉は無く、天はまたまた大雪を降らす。孫康は雪明りで讀書して夜も休まず、袁安は横臥して食糧もすでに絶えた。詩を送る人が次々とやつて来たかとおもえば（夢坡・琴南（林紘）・雨山の諸君が早朝から門を叩いて詩を投じた）、客を招く使いがやつて来てあわてて下駄の齒を折る（雨山は病をもつて辭し、醉愚（沈焜）が手紙を出して来るように促したが来ていない）。屋根つきの車に茵を重ねても風はなお入ってくるし、温かい部屋の圍爐も火種はなくならない。破れた皮衣で寒さをこらえれば肩だけが聳ち、凍えた腕首で書こうとしても腕はうまく動かない。髭をひねり衰えた姿はごま鹽の鬢毛に感じられ、手息で温め寒氣は皺だらけの顔を赤くする。好句をたまたま得ると天は唾を落とし、清談して相い對すればそぞろに雪が降る。浮き草と水が他郷で出會うように心からの友人となり、滄海が桑田になるような世の變遷を横目に見て驚く。堅匏盒の中で初めて詩會が開かれ、小蓮莊の中で舊事が説かれる（翰怡（劉承幹）の溥谿（吳興）の別宅は小蓮莊と名づけられ、その中に堅匏盒があり、上海の寓居にもこの額が懸けられている）。老いばれは酒を飲んで思いのたけを詩に發し、身を起こして舞い鐵の如意棒で撃ち砕く。〕つまり、消寒第二集の日の早朝、周夢坡も雨山もやつて来て、劉炳

照に詩を投じたという（林紓は消寒集のメンバーではないので、別の詩會に誘っていると思われる）。その雨山の詩が上引の詩である。これを讀んだ劉炳照の心は亂れ、消寒第二集（周夢坡と同郷で藏書家として有名な劉承幹（二八八二—一九六三）の上海寓居・小蓮莊で開催された）に行つてみると、はたして雨山は病と稱して來ておらず、來るよう促したが、來なかつたのである。

おそらく、前掲の雨山の詩にいう「新たな友」は、周夢坡のことなのであろう。こうして、雨山は、詩會の主宰を周夢坡に譲り、周夢坡は、雨山や劉炳照が持ち回りで主宰していた詩會を、自身が主宰する消寒集や淞社に吸収するのである。

そのようなことがあつた一九一二年、雨山が住んでいた上海愛而近（エルジン）路に、中國最後の文人と稱される吳昌碩が引越してきて、二人は深い交誼を結んだ。吳昌碩は、周夢坡をパトロンとしており、消寒集や淞社の主要メンバーでもあつた。かくして雨山は、周夢坡主宰の詩會において、吳昌碩らと文墨の交流を深めることになる。

周夢坡『淞濱吟社集』（一九一五・夢坡室藏板所收）に收められている長尾甲（雨山）「韞玉樓遺藁題詞（藁爲張君石銘元配徐咸安著）」詩（劉炳照、劉承幹、繆荃孫、楊兆鏗、吳俊卿（昌碩）、孫德謙、潘飛聲、章樞、朱鋸、費寅、周慶雲、潘夔、長尾甲、許在祥、載啓文が唱和）を見よう。

詩人星聚海之隈、淞社筵開末坐陪。京兆風流誰得似、閨房靜好竝仙才。

〔詩人は海の隅に星のように集まり、淞社の詩席が開かれ末座に付き従う。京師の風流は誰が真似ることができようか、張石銘・徐咸安ご夫妻は仲睦まじく共にすばらしい才をお持ちであった。〕
聞道芳園景最幽、春秋佳日樂賡酬。才難兼福天何妒、不許雙飛

長尾雨山が上海で參加した詩會について

到白頭。

〔聞くところによると芳園の景色は最も幽玄で、春秋の佳日には詩のやりとりを樂しんだと。才は福を兼ねるのが難しく天は何を妬んだのか、雌雄並び飛び白頭に至るのを許さなかつた。〕

雨山は、淞社の「末座に付き従う」と述べ、一參加者であることを鮮明にしている。ただ、『淞濱吟社集』には、この周夢坡の故郷・吳興南潯の有力者の夫人の逝去を悼む詩一首のみしか殘されておらず、雨山の胸中を十分に汲み取ることができない。

五、雨山がもたらした成果

雨山は、一九一四年十二月に歸國した。これにあたり、周夢坡は、「送長尾雨山（慎）太郎」還日本詩（一九一四作）（周夢坡『夢坡詩存』一九三三・私刊本所收）の中で、以下のように述べている。

三年聚首別時傷、何況海客返扶桑。江聲嗚咽岸欲裂、天醉未醒空秀皇。我欲相從汗漫遊、可堪塵事同羈縲。曠達誰能如使君、遠攜仙眷適吾邦。同文舊學商濛密、文采風流那可量。憐予琴抱松雪遺、爲哀王孫弔國殤。新詩重乞題圖畫、雪泥爪印長毋忘。夕陽在山杯在手、離笛吹散離雲忙。他時惘惘成追憶、記取淞濱煙水蒼。

〔三年も寄り合えば別れの時はつらいが、まして海外からの客が日本に歸るならなおさらだ。江音は嗚咽し岸は裂けんばかりで、天は酔つて醒めず空はさまよう。私も遠き漫遊に相従いたいのが、俗事に同じく縛られるのに堪えねばならない。豁達さでは誰もあなたに及ばず、遠くからご家族を連れて我が國に赴いた。同文の舊學を共に細かく検討したものが、その文采風流はどうして量り得ようか。私が松雪（趙孟頫）の遺琴を抱いているのを憐れみ、

帝王の子孫を哀しみ國に殉じた人を弔う。新たに作る詩で重ねて圖畫に題することを乞い、その事跡を長く忘れないようにしよう。夕日は山にかかり杯は手にあり、別れの笛は吹き散らされ離れ雲はせわしない。いつしかぼんやりと追憶しては、上海の霞立つ水邊の蒼さを心に留めておいてほしい。』

歸國にあつての詩であるから、相手を褒め稱えるのは當然であるが、それを割り引いても、周夢坡は雨山を高く評價していたと言つてもよからう。

その後、雨山は歸國の二日前、前出の白石鹿叟（六三郎）が經營する日本料亭・六三園に日中の知友を招き、別れの宴を張つた。そこに周夢坡も招かれ、「十一月上旬四日、長尾雨山歸國先二日、雨山設宴六三園、與中東朋舊話別。到者三十餘人、有小鬟彈琴勸酒、酒闌共撮一影、誠盛會也。爰賦短章、以紀之」詩（一九二四作）（周夢坡『夢坡詩存』・一九三三・私刊本所收）を作っている。

世變風雷疾、幻轉非無因。海山照烽燧、何地可避秦。獨訝瀛洲客、灑然走風塵。萬態皆在目、一笑歸東鄰。臨岐不忍別、猶與故交親。開尊尋勝地、聲伎娛佳賓。琴撥十三弦（聽葉（叶）娘彈琴）、酒勸三五巡。非曰聯邦交、差擬永和春。借彼鏡中影、名園駐芳晨。他年重相憶、記取畫中人。

〔世は變わり風や雷が駆け抜け、幻のように轉じるのも故なきことではない。海や山がのろしに照らされ、どこの地に秦を避けられよう。一人迎えた日本からの客は、灑然として風塵の中を行く。あらゆる事態をみな目にして、一笑して東の鄰國に歸る。別れに臨んで別れるにしのびなく、なお舊交と親しんでいる。酒樽を開けて美妙の境地を尋ね、藝者が賓客を楽しませる。琴は十三弦を

撥ね（葉（叶）娘が琴を弾くのを聴く）、酒は三たび五たびと勧められる。連邦の交りというものはなく、やや永和の蘭亭宴に擬えている。かの撮影を借りれば、名園は芳しい朝に留まる。後年重ねて相い憶い、寫真中の人を銘記しよう。』

ここで周夢坡は、この宴は國際交流というよりも、東晉の王羲之蘭亭宴のようなものだという。つまり、雨山は、中國の文雅に溶け込み、中國の文墨人士となつていたのである。それは、雨山が上海で詩會に参加していたからに他ならない。そして、歸國までの三年間、雨山は周夢坡主宰の詩會に出ていたことも確かなのである。

前に引いた雨山の講演録「支那南畫について」を、續けて引いておこう。

（前略）一日詩會がありました、そのとき偶然蘇東坡の誕生日にあつておりましたので、東坡の像を描いてそれにみなが詩を題したら、韻事を添えて好いであろうということになったところが、畫を描く人は吳昌碩がおりましたけれども、この人は人物畫など描ける人ではないからある人を招くことになった。その人は日本では有名な畫家である。名をいうことは遠慮いたしますが、學問のほうはあまり深くない人であります。それから俾をやつて呼んでまいりまして、東坡の像を描いてもらいたいと頼むと、その人はただちに筆を洗つて實に見ておつて面白いようにすみやかに東坡の像を描き上げました。ところが詩會のことでありますからご馳走もある、これから酒食を始めようというときであるのに、畫が出来てしまうと、ご苦勞さんお歸りになつてよろしいというのです。畫においてはかなり技術を持つており人であるが、しかるにまつたく職人か何か扱うように一杯の酒を饗しませずすぐ返

した。そのくらい交際上においても、學者と學問のない人との差別がはなはだしく露骨であります。

吳昌碩が出てくることから、これは周夢坡主宰の詩會での出來事と思われる（前引部分に、「毎月集まつて」とあるので、月例會の淞社であろう）。こういった中國文墨に對する雨山の理解は、周夢坡主宰の詩會で育まれたのである。

また、周夢坡は、主宰した詩會で作られた詩を整理して『消寒集』『淞濱吟社集』といった詩集を編纂し、自ら序文を書き、参加者の「姓氏録」も付したが、雨山も自ら編輯した『壽蘇錄』『壽蘇集』で、ほぼ同様のことを行っている。

雨山は、劉炳照と共に上海で詩會を創始し、汪淵若、朱念陶等と持ち回りで詩會を主宰するうち、詩文のみならず、中國の文墨趣味に精通して行つた。そして、さらに吳昌碩等がいた周夢坡主宰の詩會に増加して、中國の正統的文墨人士となり、歸國後、壽蘇會・赤壁會を主宰して、中國文墨の眞髓を傳へ得たのである。これは、雨山にとつても、日本の文墨界にとつても、大いなる成果と言わねばならない。

おわりに

近代日中文化交流において、長尾雨山ほど重要な役割を果たした人物はいない。雨山は、卓越した學識を具えた上で、中國に足かけ十二年も滞在し、中國には最先端の教科書編纂ノウハウを傳へ、日本には最先端の中國文墨趣味を傳えた。この分野で、これほどの偉業を成した人物は他に見あたらないのである。

ところが、この雨山の偉業は、無實の罪で教科書疑獄事件にまきこまれ、失意の中、上海に移居したことに始まるため、これまであまり

長尾雨山が上海で参加した詩會について

照明があてられることがなかった。本稿で論じた、雨山が上海で参加した詩會についても、前述のように、詳しく論及したものが無い。今回、この部分がある程度明らかにできたことには、一定の意義があると思う。

本稿では、關西大學圖書館内藤文庫所藏の資料を多く使わせていただいた。これらは、内藤湖南の舊藏になり、表紙に湖南が「劉語石詩四本、乙卯一月、雨山持贈、炳卿」（『復丁老人詩記』）などと墨書しているものもある。これらは、雨山が歸國後すぐ、湖南に手ずから贈つたもので、雨山は湖南に、そして多くの人に自身の上海での業績をわかつてもらいたかつたのであろう。筆者としては、本稿により、雨山の思いを少しでも果たせたなら、なんともうれしい。

注

(1) 長尾雨山『中國書畫話』（一九六五・筑摩書房）「著者略歴」明治三二年（一八八九）の項に「東京美術學校教授兼務」とあるが、東京藝術大學総合アーカイブセンターの吉田千鶴子氏によると、今でいう非常勤講師の立場であつたとのこと、ここでは「講師」としておいた。

(2) 長尾雨山と教科書疑獄事件については、樽本照雄『清末小説閑談』（一九八三・法律文化社）、同『初期商務印書館研究 増補版』（二〇〇四・清末小説研究会）参照。

(3) 柏木知子氏は同文で、富岡鐵齋作品ならびに周邊資料から、長尾家資料では不明であつた大正十年の第五回庚申壽蘇會の開催を明らかにされた。

(4) 勞祖德整理『鄭孝胥日記』（一九九三・中華書局）「光緒三十二年閏四月廿七日（一九〇六年五月二〇日）」に、「午後、赴長尾之約於徐園、爲

聽芝吟社詩鐘之集、至者劉語石、金夔伯、汪子淵、曹惇卿等」とあり、鄭蘇龕が長尾雨山に誘われて汪淵若（子淵は別字）主宰の詩會（聽芝吟社）に参加していることがわかる。

- (5) 劉炳照『無長物齋詩存』の封面は、雨山の友人である書家・山本竟山（一八六三—一九三四）が楷書で書いており、「明治四十一年（一九〇八）正月、日本山本由定（竟山の名）署檢」とある。竟山は、計七回、中國に遊學し、雨山を訪ねることも多かったが、この年は渡つておらず、雨山はわざわざ日本にいる竟山を紹介して依頼したと思われる。ちなみに、竟山は、歸國後の雨山を自らと同じ京都室町通りに住ませ、自らが創設した平安書道會を自らも退いて改組し、實質的會長である副會長に就任させている。

- (6) 杉村邦彦「有關長尾雨山的研究資料及其韻事若干」（『印學論談』・一九九三・西冷印社出版社所收）參照。

- (7) 周夢坡と吳昌碩の關係については、拙稿「吳昌碩と周夢坡」（二〇〇六初出・拙著『吳昌碩研究』・二〇〇九・研文出版所收）參照。

- (8) 末尾の割注に、「是日與宴者、爲海昌許狷嘯、太倉錢聽邴、澄江繆藝風、陽湖汪淵若、番禺潘蘭史、日本長尾雨山、蜀中李子昭、豫章餘笏堂、銅梁冷雲帆、嘉禾徐冠南・沈醉愚、山陰俞詒石、安吉吳昌碩、海昌徐貫雲、吳興張弁羣・劉翰怡、陽湖劉語石及予十有八人」とある。

- (9) 長尾雨山と吳昌碩の關係については、拙稿「吳昌碩と長尾雨山」（二〇〇七初出・拙著『吳昌碩研究』・二〇〇九・研文出版所收）參照。なお、雨山が題簽を書いている一九〇五年に刊行された劉炳照『感知集』の封面を、吳昌碩次女の吳丹姪が隸書で書いており、雨山は劉炳照を通して、この頃から吳昌碩と知り合っていたと思われる。

- (10) この六三園にいた琴の名手である藝者は、池田桃川『上海百話』（一九二一・日本堂）によると「叶（かのう）」という名である。中國では、

「叶」を「葉」の簡化字として使っているため、「葉娘」と記されている。